

初年次教育「第2ステージ」その先へ

杉谷祐美子
青山学院大学

早いもので、本学会は設立趣意書をしたためてから来年で10年を迎える。5周年記念誌を発刊したのがつい先頃のような気がしてならない。

筆者が山田前会長の共同研究に参加し、日本の大学の初年次教育の状況を調査したのが2001年。高校から大学への円滑な移行を目指した新生対象の教育の重要性が意識されはじめながら、まだ「初年次教育」という語が確立されていなかった頃のことである。それからみれば、「初年次教育」を冠する学会が設立され、会員500名をゆうに超すまでに成長した現在はまさに隔世の感がある。文部科学省の調査においても、2012年には初年次教育の実施率が94%に達し、初年次教育はすでに大学教育の一環として全国的に定着している。

こうしたなか、今年度の大会では課題研究シンポジウムで会員向けの調査結果が公表された。詳細は本学会誌の関田理事の論稿をご覧ください。本学会に対して「大いに期待する」という回答が約半数に上ったのは「学会大会時での情報交換の充実(方法、コンテンツ)」(51%)、「内容方法への関心を共有する大学との情報交換」(47%)であった。また、回答者の大学における初年次教育の課題として、「当てはまる(大いに当てはまる+多少当てはまる)」という回答が多かったのは、「初年次教育の方法開発や改善」(92%)、「初年次教育の効果や学習成果の可視化」(89%)、「初年次教育の内容や教材開発」(89%)であった。こうした回答からは、初年次教育が広く普及しているものの、実際の教育現場ではいまだその内容や方法、さらには評価に苦慮し、模索している様子がうかがえよう。会員諸氏はその解決の糸口を本学会に求めているのである。

かつて、筆者は全国調査の自由記述の分析結果に基づき、「初年次教育は啓蒙期を越えて、各大学の実践活動が蓄積されつつある『第2ステージ』に突入した。(中略) 今後は、現場の声を反映して、実践的課題と結びついた研究の推進を期待したい」(『教育学術新聞』第2321号)と述べた。本学会の設立大会が開催された2008年のことである。先の調査結果には、こうした当初の期待が今日まで変わらず続いているとみることができる。

折しも、一昨年には『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)』が出された。学力の三要素とともに、入学者選抜の抜本的な改革を含めて高大接続改革の検討が進んでいる。入学者選抜制度の改革論議がどのような着地点を迎えるか予断を許さないが、こうした政策動向が今後の大学教育の在り方、ひいては初年次教育の在り方に大きく影響することは論を俟たない。初年次教育はまた新たな局面を迎えつつある。

本学会の10周年、さらにはその先を見据えて、会員諸氏との対話を促し、現場の取組とそこから獲得される実践知を汲み入れながら研究を組織化していくことが今後の学会の課題であると考えらる。

(初年次教育学会理事・将来構想実行委員会担当)